

インドネシア・スラバヤのルスン・デュパックにおける共用空間の使われ方に関する考察

日大生産工(院) ○古田 莉香子 日大生産工 山岸 輝樹
日大生産工 広田 直行 日大生産工 布野 修司

1 目的・背景

インドネシア・スラバヤには低所得者向けの積層集合住宅がある。これらの集合住宅は、従前のカンポン居住者が居住し、その生活様式をそのまま展開できることを目的として計画されている。

本稿では、積層集合住宅ルスン・デュパックの、共用空間にあふれ出す物品からみえる生活行為と空間の使われ方から、その特徴的な共用空間の形態について、今後の低所得者向け積層集合住宅のあり方を考察することを目的とする。

2 方法

本研究は臨地調査を基本とする。

スラバヤの低所得者向け積層集合住宅の中で、中廊下型のルスン・デュパック、ルスン・ソンボにおいて、臨地調査及び居住者へのヒヤリング、さらに住居実測を行い、共用空間にあふれ出す物品のプロットを行う。

本稿ではルスン・デュパックを対象とし、得られたデータから、実態を把握し、共用空間の使われ方についてまとめる。

調査日：2015年7月19日～7月31日・2016年7月23日～8月5日・2017年7月26日～8月4日

3 ルスン・デュパックの概要

インドネシアで、ルーマーRumahは居住、家、住宅、ススンSusunは積み重ねることを意味し、ルーマー・ススは積層集合住宅のことをいう。縮めてルスンRusunと呼ぶ*1。

1980年代以降、高密度のカンポンに対するアプローチとして、地区の再開発が行われてきた。ルスンは、基本的にカンポンの従前居住者が居住することを前提としている。カンポンの生活様式がそのまま展開できることを理念として計画されたのが、スラバヤのルスン・デュパックとルスン・ソンボである。ソンボの計画に先立ち、デュパックの計画が実施され、基本的な理念は同じであるが、ダブル(台所)が各戸に固定されていないこと、1階にワルン(売店、食堂)等が別に用意されていたことなどの点が異なる。ソンボはそのデュパックの経験を踏まえて計画された。

デュパックはスラバヤの中心地から北西に位置する、クレバンガン地区にある。敷地面積約2,000㎡、3階建ての6棟150戸からなる、積層集合住宅である。1984年に建設された。

インドネシアの集合住宅は3つのカテゴリーに分けられる。1つ目は高所得者向けの

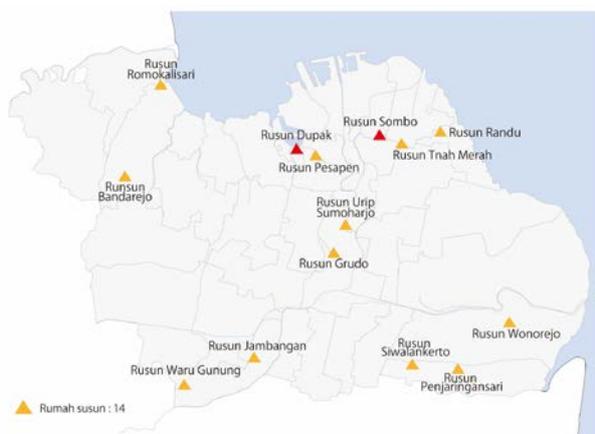


図 1. ルスン・デュパック位置

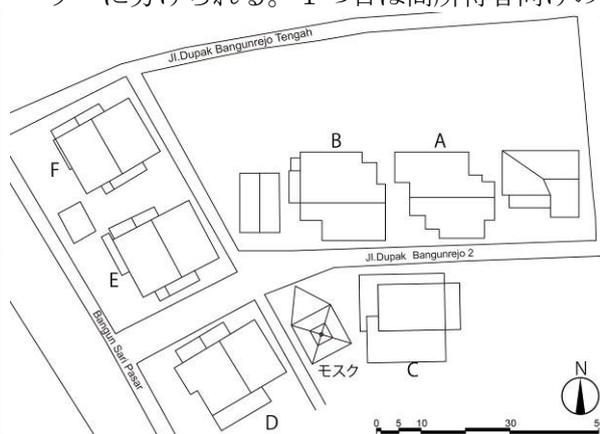


図 2. 配置図

Utilization of Common Space in Rusun Dupak Surabaya, Indonesia

Rikako FURUTA, Teruki YAMAGISHI, Naoyuki HIROTA and Syuji FUNO

分譲住宅。近年、大規模都市開発として建設され、超高層住宅が多数建設されている。2つ目は中間所得者層向け、政府補助の分譲集合住宅、Rusunami。3つ目はこの低所得者向けの賃貸住宅、Rusunawaである。

ルスン・デュパックは、いわゆる中廊下型の集合住宅で、住宅に挟まれたアルコブをもつ各階廊下を「共用空間」と呼ぶ。設計図面において、共用空間、またはその部分に特別な名称は与えられていないが、設計者であるスラバヤ工科大学教授 J.シラスは、コモン・リビング (ruang tamu bersama) と呼んでいる。(図3.平面形態 参照)

各住戸は、3m×6mの居室部分と3m×1.5mのベランダを基本のユニットとし、従前の居住者には従前家屋の面積に応じたユニット数が割り当てられる。1フロア8住戸あり、1階のみ各住戸にマンディ（水場）が設けられており、2階以上には共用でマンディとダブール（台所）が設けられている。

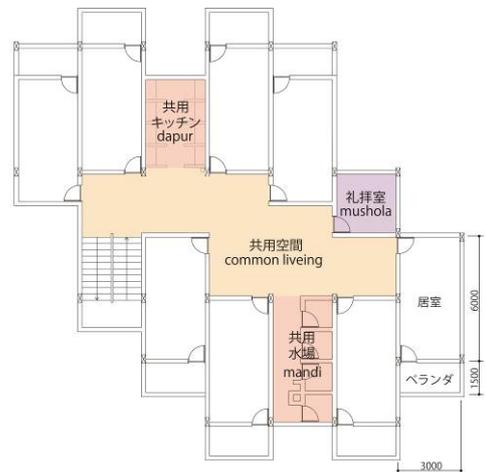


図3.平面形態（2階以上）

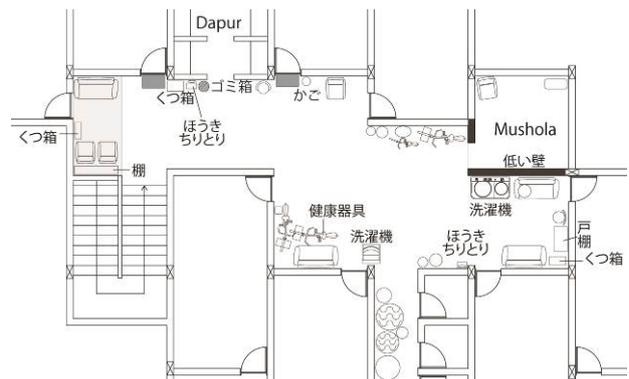


図4.あふれ出し配置例

4 カンポン住居の概要

従前住居であるカンポンの生活は、狭小住宅の場合特に、その生活のほとんどが、街路などの戸外で行われ、展開されている。また、カンポン住居は、建替えや、増改築が繰り返されつくられるのが基本である*2。

とくに高密度なカンポンの場合、街路に家具などのしつらえがあふれ出している。炊事、洗濯などは基本的に戸外で行われ、また、商業活動、生産活動なども街路において行われている。

カンポンの公的施設は、イスラム教徒が大半を占めるため、モスクやランガール（小規模のモスクをランガールと呼ぶ）が必要不可欠であり、コミュニティの中心となるため、カンポン内に必ず配置されている。また、コミュニティ施設として集会所やポス・ジャガと呼ばれる見張所などが設けられる。さらに、共同の浴場、トイレ、洗濯場などが設けられている。公園のようなものは少なく、子どもたちの遊び場は、街路そのものとなっている。

5 あふれ出しからみる共用空間の使われ方

デュパックの共有空間は、廊下以上の広さを持ち、様々なものが置かれている。その置かれている物品と空間の使われた方から、日常活動がどのように行われているのかを、あ



写真1.共用空間の居室化



写真2.生活用品のあふれ出し

る程度明らかにすることができる。それらの物品の種類と数を集計したものが表1である。以下にあふれ出し物品からみられる活動、またその特徴をa~jにあげる。(図4 あふれ出しの配置例 参照)

a. 全住棟に共通して1階に限り、自転車やバイクが多くみられる。住民の多数がバイクを日常的に用いることから、1階がバイク置き場と化している。

b. ベンチや寝台、床にござやシートを敷き、昼寝をしている住人が多くみられる。子どもを寝かせて子守をしていたり、若者が仲間同士で集まったり、寝ている姿が複数個所でみられる。共用空間はコンクリートの床で、風通しの良い環境のため、日中の気温の高い時間帯には昼寝に限らず、集まる場として快適であると言える。ござ・シートなどの、床に直接敷き、寝る行為に関係のある物品は1階には少ない。

c. 共用ダブールが意図した使われ方をしていない。ダブールとマンディは、共用空間に1住戸1ブロック設けられている。そのため各住戸内(2階以上の階)には付設されていない。マンディは水場がほかに設けられていないために、この場でしか利用できないことから、既存の設備が利用されている。しかしながらダブールは各住戸の物置化がみられ、実際の調理などは共用空間にキッチンブースが住民により設けられたり、持ち運びできる器具を用いて、いたる所で調理されている。もしくは、各住戸のベランダが利用される場合もある。もともと地面に近い高さで調理を行う、カンボンの生活様式と合わないため、意図した使われ方をしておらず、そのために調理器具などのあふれ出しが多くみられる。

d. 入口ドア前にくつ箱や玄関マットが置かれ、玄関化されている。半数以上の住戸で玄関化がみられる。くつを共用空間で脱ぎ住戸へと入るため、入口前のスペースにくつが多くみられる。

e. アルコーブの一体、もしくは玄関前スペースにソファセットが配置され、居間化(居室化)されている。共用空間であるにも関わらず、こういった例がみられることから、住戸が共用空間へと拡張していることがうかがえる。(写真1)

f. こどものおもちゃが多くみられる。とくに、三輪車やこども用車、歩行器、乳母車な

どが比較的多くみられる。こどもは棟の外で遊ぶこともあるが、小さなこどもとくに共用空間、もしくは階をまたいで遊んでいる。ボール遊びやおにごっこ、自転車遊びやボードゲームなど、様々な遊びがうかがえたが、共用空間が廊下以上の広さと、アルコーブをもっていることが多様な遊びを誘発していると考えられる。

g. イスやベンチ、机、台などの家具類が最も多くみられる。居間のように使われることが多いが、ミシンが置かれ、洋服がつけられたり、家具がつけられたりと、仕事場として使用され、日曜大工や内職などの生産活動が多く行われている。工具を広げて、机で作業を行ったり、ござを敷き地べたに座りながら作業を行ったりと様々なかたちで生産活動が、共用空間において日常的に行われていることがうかがえる。



写真3. 多様なあふれ出し物品

表1. あふれ出し物品リスト

	A棟			B棟			C棟			D棟			E棟			F棟						
	1F	2F	3F	合計																		
バイク	12			12	2		2	9				9	13			13	11			11	8	8
自転車	6	2	8	16	4	4	24	10	3	2	15	4	2	6	8	4	1	13	12	4	2	18
こども用自転車	1	1	2	2	1	2	5				0	1	2	4	7	1	2	3			2	2
歩行器・乳母車			1	1			0				0	1		1	1	1	1					0
ベンチ	1	1	2				0	1	2	2	5	1	0	0	2	1	3	1			1	1
イス・踏み台	1	1	2	4	1	2	3	1	2	3	1	1	1			0	1	1			2	2
ソファ		3	7	10		2	1	3	2	1	3	6	6	2	2	2	5	1			6	6
机			0		1	1	1	1			0					1	1	1			1	1
台	2	1	3	3	1	1	5	1	1	2	4	1	1	1	1	1	2				4	6
くつ箱	1	2	3	6	6	2	8	4	3	7	4	5	9	1	2	3	1	1	3	5	5	5
箪		1	2	3	3	2	5	1	1	1	3	1	1	1	1	2	3	3	2	5	5	5
タンス	1	1	2	2	2	2	1				1					0	1	1	1	2	2	2
玄関マット			2	2			0	2	2	2						0						0
おもちゃ			0	1	1	1	2				0			0	6	1	7	1	1	1	3	3
ゴミ箱	3	1	4	1	1	1	2				0			0	1	1	2				1	1
たらい		1	1	2	2	4					0					0						0
ウォータータンク	3	2	5	1	3	4	1				1	2	2			0					1	1
コンロ		1	1	1	1	1					0					0						0
ほうき		1	2	3	2	1	3				0	1	1	1	3	1	2	3			1	1
ちりとり		1	2	3	2	2					0					0						0
バケツ		2	2	3	1	4	8	2	2	2						1	1	1	1	1	2	2
洗濯機	1	2	3	1	1	2					0			0	1	1	2	1	1	2	3	3
かご		1	1	1	1	1					0			0	0	0	1	2			0	0
屋台	1	1		2			0				0			0	1		1					0
プロパン		0	2		2		0				0			0	2	2					1	1
鳥かご		0	1	1	2	3	2	5	1	2	3					0					1	1
健康器具		1	1				0				0					0						0
ダンボール		0			0	1					1					1	1				1	1
機械			0	2							0					0						0
パナナ	2山			2山			0				0				0							0

h. イスやベンチの中でもベンチが多くみられるが、通常のものよりも座面が広く、高さも高く、ベッドに近い形のベンチである。座ることだけでなく、寝る行為や、台として物が置かれていたり、コンロが置かれ、調理台としても使われている。様々な用途として使われているため、いたる所に置かれている。

i. ガラスケースのお店（販売ケース）が設置され、そこで生活用品が販売され、商業活動の場としても利用されている。各階に店が設置されており、住民はそれぞれのフロアにある店で、生活用品を購入している。日用品や雑貨を売る小規模な店舗が大半であり、ガラスケースに商品を並べ、住戸入口前に販売ブースをつくっていたり、入口を入ってすぐの位置に販売ケースを置いたり、いくつかパターンがある。これら以外にも、ワルン Warung^{※3}やロンボン Rombong^{※4}などの屋台もあり、1階にはリヤカー形式の屋台も見られる。

j. 物干し台、洗濯ロープも多い。共用空間にはタライなどの洗濯に関係する物品が積まれて置かれている。日常的に共用空間で手洗いの洗濯が行われていることがうかがえる。フロアによっては、二層式洗濯機が置かれている場合もある。とくにマンディの近くに置かれている場合が多く、たらい、桶、水タンクなどもある。

5 あふれ出しからみる住民相互の関係性

あふれ出しの物品は各棟、各階ごとにあまり違いはないが、共用空間をそれぞれ住人がきれいに使おうとしている階もあり、ものあふれ出しが比較的少ないところがある。こういった階では、住人同士の意思疎通がはかられ、それらが意識的に行われている。また各棟の1階に設置されている掲示板に各住戸に住む世帯主が、顔写真付きで掲示されている。どの棟のフロアも誰が住んでいるか、一目でわかるようになっており、住んでいる住人がはっきりしているため、交流がはかりやすいと考える。共用空間にものあふれ出し、一部専有化がみられても、住人同士で争いが起こることはみられない。各フロアにムシヨラ（礼拝室）がコミュニティの核として置かれているのも、そういった意味があるといえる。

6 まとめ

カンポンの生活が基本的に外部空間で行われているように、デュパックでは、共用空間を中心として、多様な活動が展開されていることがわかる。本稿で明らかにしたことを以下にまとめる。

(1) アルコーブが設けられることで、空間が分節されることが居室化を促し、物のあふれ出しを誘発する傾向がある。

(2) 共用空間が居室として認識しているにも関わらず、大型物品の置き場所となっている。家具などのイスや机は、居室のしつらえとして置かれおりもともとの設計意図である、コモン・リビングとして利用されていると言える。

(3) こどものおもちゃや、こどもたちが遊んでる姿が多くみられることから、廊下以上の広さをもつことが、こどもにとっても、共用空間以上に遊び場として認識されているといえる。

(4) 廊下の空間をデザインすることは、コミュニティの感覚を生み出す機会となると考える。アルコーブがあることで、住民が自由な使い方をすることができ、住民相互のコミュニティ創出のきっかけとなると考える。

(5) 共用空間で多様な生活行為が行われ、中廊下のカンポンの街路化がみられる。さらに生産活動や商業活動など様々な活動もみられることから、カンポンの空間構造が多く階で再構築されているといえる。

(6) 住戸が狭小であるために共用空間を必要とするのではないかと考えられるが、各住戸を広くした場合、高収入者層への居住者の住み替えが起こることが既往の事例からも予測される。従前居住者の転出を防ぐことが課題でもあるため、この形態がとられたと考えられる。

【参考文献】

- 1) 山本直彦, 田中麻里, 脇田祥尚, 布野修司 『ルーマー・ススン・ソンボ（スラバヤ, インドネシア）の共用空間利用に関する考察』(1997, 12)
- 2) 神吉優美, 東樋口護, Budi Prayitno 『間取りにみるルアン・タムの優位性—再開発積層集合住宅における住み方調査その1』(1994, 9)
- 3) 藤川朋子, 丁志映, フロウフェラ, 藤本秀一, 米野史健, 小林秀樹 『インドネシアの集合住宅における共用空間の使われ方と維持管理に関する研究—首都ジャカルタのルマ・ススン 5 団地を事例として』(2011, 8)
- 4) 柴田駿介, 横堀肇, 戸沼幸市 『ジャカルタにおける低所得者向け住宅供給に関する研究』(1995, 8)
- 5) 布野修司 『インドネシアにおける住居環境の変容とその整備手法に関する研究』(1985)

【注】

- ※1 参考文献 1)
- ※2 参考文献 5) p. 558
- ※3 インドネシアで日用品や食材を販売する場所のことをワルン warung と呼ぶ。
- ※4 インドネシアで食べ物や売物するための屋台などをロンボン rombong と呼ぶ。